

授業概要

日本語学（各論）では、慣れ親しんだ現代日本語を中心に、古語や方言なども題材としつつ、それらを科学的・客観的な視点から分析する普遍的な言語学の知識・思考方法を学ぶことを目的とする。文学を学び論ずるうえでも、言語学の構造主義的なものの考え方は重要である。社会言語学、比較言語学（文献および方言）、対照言語学について講義する。

授業計画

第 1 回	ガイダンス（社会言語学とは何か、日本語東京方言の鼻濁音について）
第 2 回	比較言語学（比較言語学とは何か、インド・ヨーロッパ語族について）
第 3 回	対照言語学（対照言語学・類型論とは何か、アイヌ語や世界の言語について）
第 4 回	日本語中央方言の文献のセグメント史について①（比較言語学）
第 5 回	日本語中央方言の文献のセグメント史について②（比較言語学）
第 6 回	日本語中央方言の文献のセグメント史について③（比較言語学）
第 7 回	日本語中央方言の文献のセグメント史について④（比較言語学）
第 8 回	東京都伊豆諸島八丈島・小島・青ヶ島方言について（比較言語学）
第 9 回	鹿児島県奄美沖永良部島国頭方言について（比較言語学）
第 10 回	日本列島などのふるえ音・吸着音・膨れっ面について（社会言語学）
第 11 回	標準語のアクセント・イントネーションについて（比較言語学）
第 12 回	中央祖語・琉球祖語のアクセント祖体系について（比較言語学）
第 13 回	高知県内の京阪式と東京式アクセントの比較方法①（比較言語学）
第 14 回	高知県内の京阪式と東京式アクセントの比較方法②（比較言語学）
第 15 回	高知県内の京阪式と東京式アクセントの比較方法③（比較言語学）
第 16 回	試験（筆記試験による）

到達目標

主に日本語を題材にして言語の社会性、言語の歴史性、言語の多様性を学ぶことで、言語と社会・歴史との係りや、文化の多様性のあり方について、科学的・客観的・国際的に理解できるようになる。

履修上の注意

同じ日本語であっても、古語や方言の音声を理解するには練習が必要なので、すでに日本語学（概論）を受講していることが望ましい。日本語学（概論）を受講していない者が受講する場合は、日本語学（概論）の授業資料を渡すので、早めに目を通してほしい。

予習・復習

適宜、宿題を出す。その宿題に予習・復習の効果がある。

評価方法

授業中の練習課題 30%、宿題 30%、期末試験（筆記試験）40%で総合的に評価する。期末試験の受験には 3 分の 2 以上の出席が義務付けられているが、試験は全 15 回の内容が前提となるため、全 15 回、休まず出席してほしい。遅刻は 2 回で 1 回分の欠席として扱う。

テキスト

その都度、授業資料を配付するので、テキストの購入は不要である。資料をなくさないよう管理すること。次週以降も使用する資料は忘れずに持って来ること。